



Tan Malaka. *From Jail to Jail*. Translated and introduced by Helen Jarvis, Monographs in International Studies, Southeast Asia Series No. 83. Athens, Ohio: Ohio University Center for International Studies, 1991. Vol. 1 cxlvi+303p., Vol. 2 viii+306p., Vol. 3 viii+454p.

東南アジアのナショナリズム運動の指導者たちはすぐれた自伝や日記、小説、詩歌を数多く残しているが、その系譜のなかには例えばホー・チ・ミン『獄中日記』やシャフリル『流刑地より』のように、あるいはホセ・リサール『ノリ・メ・タンヘレ』のように、獄舎や遠島の閉ざされた空間において、また、遠い異郷の地であって記されたものがある。このような条件は強いられたものであれみずから選び取ったものであれ、いずれも高度の理念化、抽象化が求められる場であって、それだけに言語を唯一の武器として世界に立ち向かわんとするような彼らの作業には、東南アジアのナショナリストたちの思想の営みももっとも純粋なかたちで示されている。生涯の大半をこうした〈旅〉のうちに過ごしたタン・マラカ (Sutan Ibrahim gelar Datuk Tan Malaka, 1897-1949) は、ナショナリストの宿命をもっとも象徴的に引き受けてきたものであり、その自伝『牢獄から牢獄へ』は、歴史に対する透徹した認識によって同時代の貴重な証言であるのみならず、対象世界との緊張と密度の高さ、表現の文学性において、伝記文学の白眉をなすものといつてよい。

インドネシア独立革命のさなか、1947年から48年にかけてスカルノ共和国政府の牢獄で著された本書は、題名が示すように、タン・マラカの生涯における四度の逮捕・投獄・追放を軸として、アジアの民族解放闘争と国際共産主義運動をめぐる自身の体験と見解を綴ったものである。構成は、第一巻と第二巻が、オランダ留学、帰国後の農園での教員生活を経て共産党入党、党議長としての活動、祖国追放、モスクワ行き、中国と東南アジ

アでのコミンテルン職員としての活動、帝国主義権力による追跡と逮捕、病身をおしての逃避行と潜伏、日本占領下の祖国潜入。時代からいえば、第一次世界大戦とロシア革命から上海事変を経て、日本軍の東南アジア侵攻から軍政、1945年8月のインドネシア独立宣言の直前まで。これに対して、第三巻は、「 polemik の書」とみずから記すとおり、独立革命期のインドネシア国内政治の分析、対オランダ武力抵抗派の統一戦線《闘争同盟》の主張、彼が逮捕される因となった《7月3日事件》——いわゆる「タン・マラカのクーデター未遂事件」——の真相糾明と共和国政府への反論、などに主眼が置かれている。したがって、インドネシア国内はもとより、ヨーロッパ、ソ連、中国、フィリピン、マラヤなどを舞台に、それぞれの時代と地域の反帝国主義運動にかかわる自身の行動を綴り、さながら波瀾万丈の冒険小説を読む趣の第一、二巻と、スカルノ＝シャフリル派への反撃の書である第三巻では、自伝とはいってもかなり色合いを異にする。

タン・マラカはその30年におよぶ政治活動のうち、インドネシア国内の政治の表舞台に登場するのはわずかに2年足らずで、残りは亡命生活と地下活動、潜伏、獄中に過ごした。このため、インドネシアではしばしば、その卓抜な革命思想よりもむしろ、神出鬼没のヒーローとして大衆小説に描かれ、幻の革命家として半ば伝説化された存在となっている。また、彼の人物像も、評価する側の立場によって、「純正のナショナリスト」「民族共産主義者」「イスラム指導者」「トロツキスト」とさまざまなレッテルが貼られてきた。それだけにタン・マラカ研究と東南アジアの民族運動史にとって第一級の史料価値をもつ自伝の英訳は、刊行が久しく待たれていたものである。

『牢獄から牢獄へ』は、タン・マラカの100編をこえる論文、著作のなかでもっとも知られたものでありながら、原書が稀覯本となって入手困難なこともあって、十分に理解されることのなかった孤独な書物である。その孤独から救い出し、タン・マラカをしてタン・マラカを語らしめること——訳者のHelen Jarvisが十年以上かけて本書の英訳に取り組んできた意図は、おそらくここにあ

るといってよい。そして彼女の執念はみごとに実っている。むろん、変転きわまりない革命運動の渦中に身を置き、棺を蓋ってなお褒貶定まらぬ人物の自伝であってみれば、その記述が完全な客観性につらぬかれているということはできず、運動の解釈やスカルノをはじめとする政敵の評価にも一方的な論断があることはまぬかれない。また、獄中であって依拠すべき資料もなく、ほとんど記憶力（それにしても、驚くべき記憶力!）のみをたよりに書かれたという経緯から、事実の誤認と思われる箇所も少なくない。しかし訳者は、複数版のテキスト（とりわけ第三巻）の比較と、博引旁証、精緻きわまる膨大な訳註を通じてそれらを十二分に補正しつつ、丹念な読みにもとづく正確な翻訳によって原書の味わいをあますところなく伝えている。なによりもここにはタン・マラカとその作品に対する深い愛情がある。『牢獄から牢獄へ』は最良の訳者を得たというべきである。

訳者の情熱は、訳註と解説が全分量の半分に及んでいることから察せられるが、とくに第一巻に付された解説は、Harry A. Poezeの浩瀚なタン・マラカ伝¹⁾でも触れられなかった部分を補う

- 1) Poeze, Harry A. *Tan Malaka: Strijder voor Indonesie's Vrijheid, Levensloop van 1897 tot 1945*. 's-Gravenhage: Nijhoff, 1976. タン・マラカに関する論考としてはほかに次のものがある。Anderson, Benedict R. O' G. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*. Ithaca: Cornell University Press, 1972. Alfian. *Tan Malaka: Pejuang Revolusioner yang Kesepian*. *Prisma* 8, August 1977. (邦訳は「天翔ける革命の思想——伝説の革命家タン・マラカ」渋沢雅英・土屋健治(訳)。『真実のインドネシア』T. アブドゥラ(編)所収、東京: サイマル出版会、1978年) Mrázek, Rudolf. *Tan Malaka: A Political Personality's Structure of Experience*. *Indonesia* 14, October 1972. Noriaki Oshikawa. *Patjar Merah Indonesia and Tan Malaka: A Popular Novel and a Revolutionary Legend*. In *Reading Southeast Asia* Vol.1. Southeast Asia Program, Cornell University, 1990.

また、タン・マラカ自身の著作はこれまで、インドネシア国内でも復刻版は出されておらず、外国語への翻訳としては次のものが唯一である。『大衆行動——インドネシア共和国への道』(日野遼一(訳) 鹿砦社 1975年)、『牢獄から牢獄へ、タン・マラカ自伝』第1巻、第2巻(押川典昭(訳) 鹿砦社 1979年、1981年)

ものとなっている。なかでも、これまで謎に包まれてきた1948年9月のタン・マラカ釈放をめぐるインドネシア共和国内部の政治力学(例えば、マディウン事件との関連性)、および1949年2月のゲリラ戦中の彼の死因を解き明かそうとした箇所は、丹念な記録収集と関係者からの聞き取り証言によって構成されたもので、速断は避けながらも、説得力があつてまことに興味深い。本訳書は、たんなる翻訳をこえて、『牢獄から牢獄へ』という稀有の記録をすぐれた史料として確立し、タン・マラカとインドネシア独立運動史研究に新生面をひらいた画期的な労作である。訳者に敬意を表したい。

タン・マラカはひと筋の光を放ちながらアジアの革命の舞台から消えていったようにみえる。しかしその光芒のきらめきと射程の長さはほとんど比類がない。いま、あらためて『牢獄から牢獄へ』を読み返して思うのは、思想の有効性、あるいは思想の孤独といったことがらである。むろん、ここでいう思想とは、現実の政治にただちに還元されるようなものではない。それは譬えていえば、遠い宇宙の彼方の深い闇にむかって放たれた光が、何光年かの後、反射して返ってくる——そういう光を発する光源体のようなものをさしている。ナショナリズムの運命やイデオロギーの終焉がうんぬんされる今日、そうした稀な光源体であるタン・マラカの自伝が英訳されたことは、ひとり東南アジア研究のみならず、世界の政治思想史研究にとって意義深いものと信ずる。

なお、訳者はオーストラリア、ニューサウスウェールズ大学のInformation Managementの講師である。

(押川典昭・東南アジア比較文学研究)